



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌の開発とアイヌ民族
Author(s)	天野, 哲也
Relation	北海道大学キャンパスにみる自然と人間の歴史
Issue Date	2002-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76093
Type	book part
File Information	78-84.pdf



札幌の開発とアイヌ民族

天野 哲也

北海道大学総合博物館

はじめに

いまから125年あまり前、1876年（明治9）に北海道大学の前身である札幌農学校ができたころ、今日の札幌にあたる地域はどのような状態であり、そこでひとびとはどのような暮らしをしていたのだろうか？急増しつつあった内地からの移住民（和人）とアイヌ民族はどのような関係にあったのだろうか？

北大との関連では、この問題は次のように考えることができる。北大の構内には、北海道の先住民アイヌ民族の祖先である擦文人たちの暮らした跡（遺跡）が残っている。札幌農学校をつくるときそこにアイヌ民族は住んでいたのだろうか？住んでいたのならばかれらはどのような暮らしをしていたのだろうか？

Ⅰ 近世、江戸時代末の状況

a 17世紀（寛文年間1661～1672）

『津軽一統志』に、「さつほろ」にアイヌ民族が住んでいること、その上流「ちよまかうた」にアイヌ民族が多く住み、ここに松前からの船がやってきてアイヌ民族と交易をすると記されている。残念ながらこれらの人口は記録されていない。

史料 1

「石狩^(湊)浜口より一里程登り候て、はつ^(し)はやふより二里程登候てさつほろと申所に狄有。さつほろの枝川に豎横半里計の沼御座候由。川^(湊)より順風に二日登候て、ちよまかうたと申所に狄多御座候。松前よりの船ちよまかうた迄参候。方々の狄共ちよまかうたへ集りあきない仕候由に御座候。ちよまかうたより津石狩と申所迄川路二日に登申候由。是迄大船通に能候得共、水はやく候て、中々難儀仕候^(致)由、ちよまかうたより上へは船登不申候。」
『津軽一統志』

b 18世紀初期（享保年間1716～1735）

松前藩は、石狩川流域では「はつしゃふ」「しやつほろ」「しのろ」「つい石狩」「かばた」「いへちまた」「ゆふばり」「嶋まつふ」の8地域に「場所」を設定し、松前藩の12人の藩士（「知行主」）にこれらの地域のアイヌ民族との交易権をあたえた。それぞれの「場所」のアイヌ民族は、かれらが得た産物（干し鮭・熊皮・熊胆・鷹の羽など）を、上記の特定の知行主から交易権を請け負って6～7月に船を仕立てて石狩河口にやってきた商人と交易した。また河口でのサケ漁の権利は藩主にあった。河口でのこのような漁は遡上する鮭の減少をまねき、したがって上流域でのアイヌの生活・社会に影響を与えずにはおかなかったはずである。

松前藩はアイヌ民族にどのように「あいさつ」したのだろうか。この「商場知行制」はのちに蝦夷地（北海道）全域を藩主の直轄地とし、商人が各場所の経営を一切請け負う「場所請負制」に移行した。

史料 2

「一、石狩大川也、秋生鮭沢山（中略）同所夏干物積船参ル、夏場所志摩守様。松前内記殿。松前平次右衛門殿。其外家中佐藤権左衛門殿。下国金左衛門殿。南条安右衛門殿、松崎太次右衛門。酒井作之右衛門。高橋嘉左衛門。小林兵左衛門殿。蠣崎時右衛門殿。土谷弥七郎殿。出物干鮭沢山、熊ノ皮・狐ノ皮・兎ノ皮川上之蝦夷共持参ル、浜辺之蝦夷数子・油等もアリ、五百石積より二百石積之船？拾六艘右之川エ六月二参り七月二帰ル、運上金年々不同、内四艘分之運上金。志摩守様工揚ル、石カリハ夏塩鱒船六百二艘一ケ年二舟一艘ニテ百両ツ、上ル、・・・」『蝦夷商賈聞書』

c 19世紀

第一次幕府直轄（文化4年1807～文政4年1821）。「場所請負制」の弊害が深刻になり、年次ごとの入札制による請負制に移行した。

第二次直轄（安政2年1855～）。場所請負制を廃止し、安政5年、請負人阿部屋（村山）伝治郎を罷免し直捌、イシカリ改役所を設置した。

II アイヌ民族の人口推移

石狩場所のアイヌ民族の人口について正確・詳細なデータはあまりない。天明6（1786）～慶応元（1865）の約80年間の人口推移をみると、13場所全体としてもまた個々の場所も、天明末から寛政・文化7年までの間の急増と、その後の激減が特徴である（図1）。

この文化前半期のピークをはさんでその前後、安永9（1780）と文化14～文政元（1817～18）には天然痘が大流行して石狩場所でもそれぞれ500名以上のアイヌの死者をだしている。したがって文化前半期のピークは、天然痘による人口激減からの立ち直りと、再度の天然痘の流行による人口激減によってなるものとあるていど説明できる。そのように考えると、文化7年のピークが示す石狩場所全体のアイヌの人口3027名は本来（17世紀段階）のアイヌの人口の上限値として妥当な数値といえるのではないか。

そのうちの、今日の札幌市にはいるハッサム・上サッポロ（豊平川左岸）・下サッポロ（伏籠川下流）・シノロ・ナイホ各場所のアイヌの合計は555名である。ただしこれら各場所から河口の場所トクヒラに移動して雇用されていたアイヌがいたはずなのでこの555名と、1家族平均5人としてこれからさらに推定できる111戸は、うえにみた上限値の中の下限値となり、ほぼ受けいれるに足る数値としてよいであろう。

かつて筆者は、琴似側流域に9～13世紀の400年間に建てられた擦文時代の竪穴住居の数を約1000個と推定した。これらが平均10年ごとに建て替えられた住居の跡が累積したものと仮定すると、25戸、125名規模の集団をそこに推定できる。これと上記17世紀のアイヌ民族の人口との差を400年間にわたる生活向上、社会進歩の成果とみることは不可能であろうか。

札幌における和人の定住は、安政4年（1857）志村鉄市とその妻子3人が豊平河畔（3

*1「文化7年ハッサム」はデータなし

*2「慶応元年」の人別帳はハッサムにまとめて集計

*1「文化7年ハッサム」はデータなし

*2「慶応元年」の人別帳はハッサムにまとめて集計

	天明6(1786)	天明末～寛政初	文化4(1807)	文化7(1810)	安政3(1856)	慶応元(1865)
トクヒラ[タ]	64	120	815	1170	227	-
現札幌市内関係 ハッサム	26	56	34	(-)*1	21	98 *2
上サッポロ	29	50	187	194	79	-
下サッポロ	41	73	119	194	26	-
シノロ	19	37	125	138	38	-
ナイホ	8	20	28	29	13	-
B 小計	123	236	493	555	177	98
石狩13場所	344	657	2285	3027	655	439

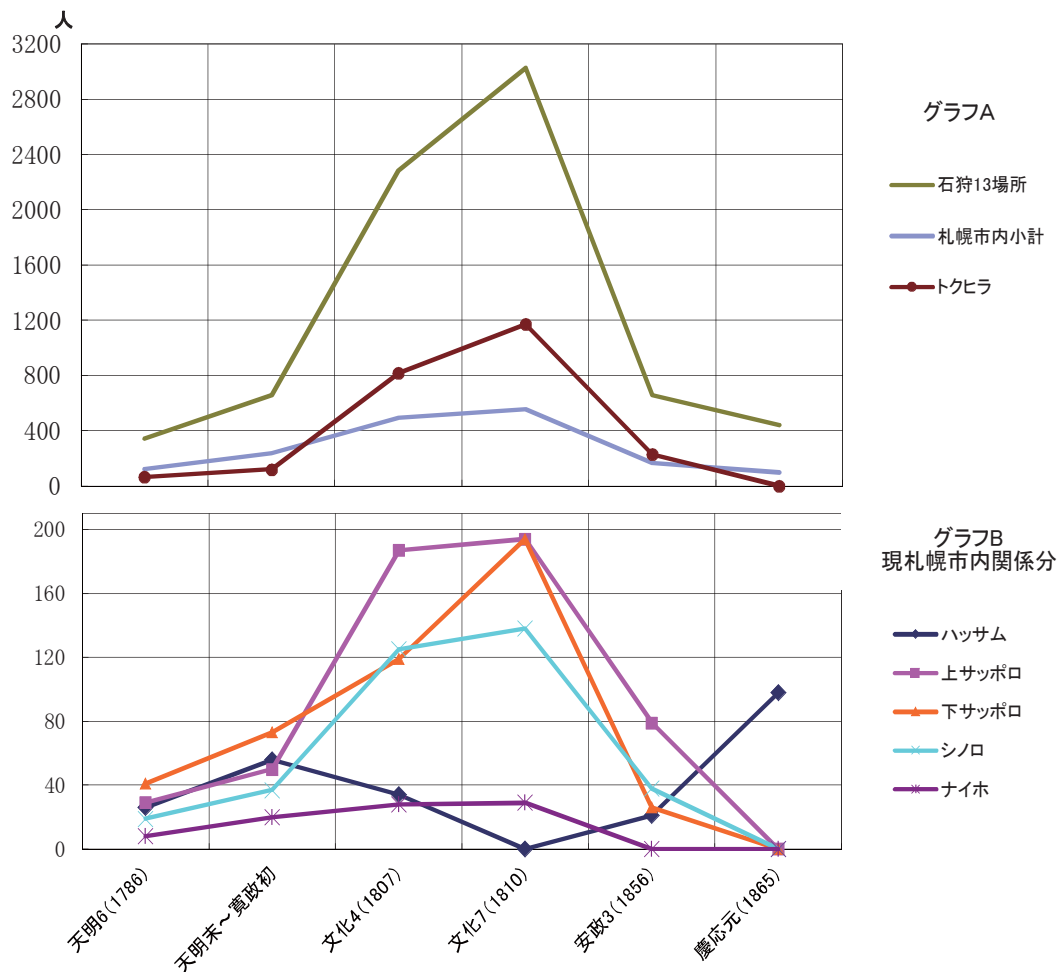


図1 イシカリ13場所におけるアイヌ人口の変遷（1786～1865年）
（『新札幌市史』 p.450・856・858の各表から作成）

条1丁目附近)に居を構えたことが始まりだと言われている。そのころ、アイヌ民族は、伏籠河畔の元村町中通大木附近のサッポロの乙名(長)イコレキナと、偕楽園[清華亭]付近サクシュコトニの乙名琴似又市、発寒の乙名コモンタなどがいられている。かれらは毎年夏季(7~10月)石狩役所に出稼ぎにゆき、冬前にそこで労賃の勘定を受けて、食料などを購入して各自の集落(コタン)に帰った。12月末から翌年春までの間は山で狩猟をおこないクマ皮・熊胆・キツネ皮などを獲てこれを石狩役場に持ってゆき売った。

III 明治初期の札幌とアイヌ民族

さて慶応元年(1865)には「ハッサム」(サッポロを変更)28軒98人(男49女49)のアイヌ民族が数えられている。うち狭義のハッサムには4軒(コモンタほか)、上サッポロには1軒(モニヲマ)のアイヌの家がありあり、下サッポロ(フシコサッポロ)・シノロ・ナイホは無人か廃墟という寥々たるありさまになっていた。サクシュコトニのコタンについてはここに記述がない。しかし堀三義『北役日誌』明治8年(1875)8月11日によると、偕楽園の先数百歩のところにアイヌの家が2,3軒あり、老夫婦が暮らしていた。また「偕楽園絵図」(図2)には、明治13年(1880)建設の清華亭や孵化場などとともに、園内の博物場の北東側対岸(サクシュコトニ川左岸)にアイヌの家屋(図3)が記述・描写されているので、サクシュコトニのコタンは明治中頃までは存続していたと考えられる。



図2 偕楽園絵図

史料3

「当所二十軒と有れども、十九軒は当所を見た事も無もの、二十余人は何時か黄泉の鬼と成しもの、十余人はトカチえ行居ものをもて、当所の帳面に志るし置こと、如何にも(抱)棒腹に堪たり。遺恨の余り蕪雑に過れ共、軒別の相違を志るし置ことなり。」『丁巳日誌』

史料4

「石狩場所サッポロなる処の小使役を勤けるモニヲマといへるは当年三十七歳、妻はクスリモンといへるがありしも、是は番人に取りられて、今は七十余歳になりけるイメクシ



図3 偕楽園絵図部分 アイヌ家
(その土地の先住者の意味で土人と記述されている)

モといへる母と叔母と三人にて暮しけるが、性彫を好みて常に匙、手拭懸け、小刀の鞘、膳、椀、菓子器、印籠等種々の物彫て、又短刀の鞘に唐草雷文等を彫すると衆目を驚かざることなし。又唐物等出して夫を真似さするに、又一等の趣味ありて、其妙筆紙の及所にあらず。人ありて其彫物を好む我意に適せざる時は、三月、五月にせよ刀を手に握らず、適する時は昼夜の差別なし彫なりて、我が意に叶ふや是を贈る。我に不適時は眼前にて打碎捨、往昔飛騨の匠たる甚五郎、運慶、堪慶等も斯やと其高顔は思はるゝ斗なり。余昨年巳年^(安政四)一つの彫物を頼み、彫成て年月と其名を墨もて書き、是を彫置ん事を命ずるに、やゝ暫く是を眺め居て刀を取り彫るに、筆勢の遅緩中て春蚓秋蛇の論にあらず。一丁字を不弁ものにして如此工有事衆人驚歎せざるなし。性酒を嗜む。時としては密に彫し物を持居て酒を募るにぞまた愛すべし。」
『近世蝦夷人物誌』

史料 5

「サツホロ小使モニヲマと申者、細工第一ト相習候者御座候処、当節祖母一人ノミニテ妻子ナシ、其上祖母もサツホロ山奥へ一人相残り、当人ノミ此処ニ罷在暫時ナリ共、祖母ノ機嫌相伺可申ト存候得共、支配人ヨリ堅ク被相禁、無^き扨其儘機嫌モ不相伺、尤モ前妻ヲ迎候得共、当処番人藤吉ト密通、遂ニ同人ニ被^さ奪^はれ^る残念次第ニ御座候由、相嘶居申候。」
『入北記』

農学校創立の2年後、明治11年（1878）に来道したE.モースは、日記『日本その日その日』に、7月30日「(農学校宿舎から)数マイル[5km前後か]離れた森まで[馬に乗って]行った…」ところで数人のアイヌに出会い、彼らがやってきた部落[ハッサム、あるいはサ

クシュコトニ]を訪問したと記している。これらのアイヌは、数日前に仲間を殺したクマを獲るために弓を仕掛けていたところであった。なお同年1月にも、円山－藻岩山中で冬眠中の雄のヒグマが手負いになって、平岸－月寒－白石－雁来と逃げまわり、丘珠で炭焼きの一家を襲い2名を殺した。

むすび

豊平川扇状地は氷河期後に形成が完了し、森林が回復した。扇状地末端附近に連なる泉からわき出た良質で豊富な湧水は小川となって湿地帯を蛇行して下った。この湧水地帯はサケなどの魚類、それを捕食するクマなどの動物、そして人間が集まるところ、出会うところであった。環境が多様であり、バイオマスも高い。附近での人間の居住はおよそ2300年前、縄文時代晩期にさかのぼり（文学部総合研究棟建設予定地）、続縄文期（K135遺跡、現札幌駅構内）、擦文文化期（植物園付近から北海道大学構内・・・）アイヌ文化期とつづいた。そして明治時代になって扇端附近に並ぶようにビール工場や農学校・開拓使などの施設が建てられた。

札幌農学校創立当時、札幌にはアイヌ民族はおよそ30家族100人前後がくらしていた。その数は、古くから鮭・ニシン漁のため石狩場所に雇用されて移動していた者がいること、和人社会のさまざまな影響（資源の占有や搾取・差別・暴力など）、さらに天然痘の影響などによって、本来の水準から減少していたと考えられる。

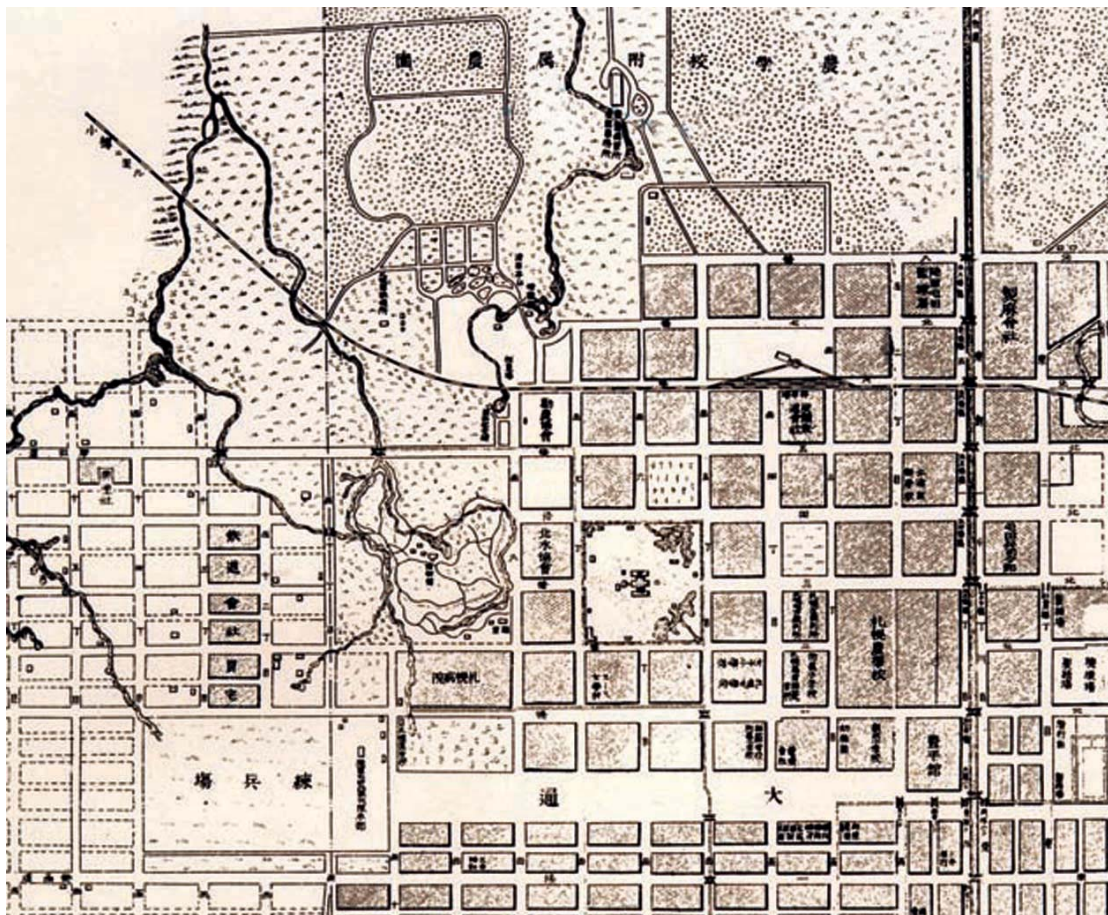


図4 明治24年の札幌市街図

農学校に近いところでは、サクシュコトニ川の当時のみなもと（植物園とJRの間にある伊藤邸内の泉）から偕楽園（現在の清華亭）附近にあったサクシュコトニ・コタンに琴似又市家など数家族が生活していた。代表の琴似又市は開拓使によって明治5年（1872）、農学校の前身「開拓仮学校」（東京）に和人学生とともに留学させられたエリートであった。森林につつまれたその景観は現在の植物園などからも想像できる。そこにはかなりの量のサケの遡上があり、山野にはヒグマなどの動物が多数生息していた。

しかし明治12年（1879）開拓使は布達で一方向的に、アイヌ民族・和人をとわず河川での鮭鱒漁を曳き網に限定し、しかも夜中および支流での漁を禁止した。これにより、アイヌ民族はテシ・ウライなどの漁獲施設（図5）を用いた伝統的な生活を維持することが困難になった。琴似又市家なども間もなく転居せざるをえなくなり、コタンは消滅させられた。

サクシュコトニ川の方は、昭和初期ころまでサケはのぼっていたようであるが、戦後、昭和25・6年（1950-51）ころ水量が急減して涸れ川になり、北海道大学構内部分については昭和49年（1974）11月に河川区域指定解除になり、かなりの部分が埋められた。

この川の流量や礫層の実態、これらに規定された産卵床の規模、アイヌ・コタンや擦文集落の規模・人口などの解明は今後の重要な課題である。



図5 テシ漁

参考文献

- 犬飼哲夫・門崎允昭 1987『北海道の自然 ヒグマ』北海道新聞社
岩沢健蔵 1986『北大歴史散歩』北海道大学図書刊行会、札幌
加藤好男 1991『石狩アイヌ史資料集』私家版、札幌
札幌区役所編 1911『札幌区史』
札幌市教育委員会文化資料室編 1980『豊平館・清華亭』さっぽろ文庫5
札幌市教育委員会文化資料室編 1997『開拓使時代』さっぽろ文庫50
札幌市教育委員会文化資料室編 1989『新札幌市史』第1巻、通史1
更科源蔵／更科光 1976『コタン生物記』Ⅱ 法政大学出版局
谷本晃久 2002『琴似又市と幕末・維新期のアイヌ社会』（平成14年度札幌会場「普及啓発セミナー」『レジュメ』）

お世話になった方々

伊藤義郎（伊藤組）、遠藤匡俊（岩手大学）、小野裕子（藤女子大学）、
笠原明子（元北海道大学）、谷本晃久（北海道教育大学岩見沢）、興津 淳（北海道大学）